

**BLACK  
STUDY  
VOL.2**



## INTRODUCTION

# BLACK STUDY

2012年5月に東北学院公認サークルとして発足。

「 afro = アメリカンなくして  
今のアメリカはありえるか? 」

音楽を代表とするアメリカ黒人文化を知るべく日々挑戦。

毎週火曜東北学院土樋キャンパスを拠点とし、  
ブラックカルチャーがあるとこならどこへでも。

音楽はもちろん、映画を見たり、  
ライブに行ったり、  
ターンテーブルで遊んでみたり。

文化研究は、その文化をより楽しむための手段。

**WEB** [society-of-black-culture-studies.tumblr.com](http://society-of-black-culture-studies.tumblr.com)

**MAIL** [black.culture.studies.tgu@gmail.com](mailto:black.culture.studies.tgu@gmail.com)

**Twitter** @black\_tgu

designed by Ryutaro Kimura



## [くろい音楽室 (ver BLACK STUDY)]

2014.1.13 にせんだいメディアテークにて第三回くろい音楽室が行われました。今回のテーマは「赤べこレコーズの調べ〜クラブ歌謡曲〜」。

子どもから年配の方、私達ブラックカルチャー研究会も参加し、世代を超えた意見が交わされました。私達はというとほとんど初見(聴)の曲。年配の方はうんうん、これこれとうなずいてらっしゃいますが、なんだこれ?という歌詞もたくさん。ただ全ての曲、「イケてる!」と感じました。

はまさんもおっしゃっていた通り、そもそも音楽嗜好に偏りがあるし、昔の曲も好きな私たち。和モノへの扉を開いてしまったかもしれません(石坂浩二のあの曲はドーブすぎる・・・!)と好き勝手言っておりますが、くろい音楽室ブラックカルチャー研究会バージョンを開催してみましよう。

黒人研究の視点から、とまでは言えないかもしれませんが、少し文学的に。実際のくろい音楽室で紹介された曲をひとつだけピックアップして、その歌詞の世界を探求します。

*mocha suzuki*

黒い音楽室 <http://table.smt.jp/?p=5296>

流星都市 / 小坂忠 (1975)

月灯りきみの肌が青白く炎える  
ひるがえるスカートから街が広がるよ  
いつも首ったけ きみに首ったけ  
朝まで膝まくら うとうとさせて  
この巻き毛このくちびるが夢を紡いでる  
窓の外 H.C. ウェルズのサブマリン浮かぶよ  
いつも首ったけ きみに首ったけ  
キャプテン・ネモの弾くハモンドの調べ  
流れ星 雨のように降り注ぐ都市に  
ふるえてるきみを抱いて夜をわたり行く  
いつも首ったけ きみに首ったけ  
あたたか胸の中 うとうとさせて  
いつも首ったけ きみに首ったけ  
朝まで膝まくら うとうとさせて



## 「流星都市」の歌詞からみる都会の姿

曲はもちろん聞いて頂ければ一番ですが、それも困難な時代の曲。私の個人的な印象だと「流星都市」のそのままの感じ、浮遊感ときらびやかな感じが同居しています。歌詞は少ない描写と同じフレーズのフックのくり返し。くろい音楽室でも意見の出たとおり、歌謡曲の歌詞はラブや現代の JPOP と比べ簡潔です。

### "都市に出たい!"

ではこの歌詞を「都市」というキーワードで見えていきます。田舎(家)を捨て、都会へと繰り出し、成功する。1970年代前半においてそれは「街/町」という表現で、安らぎと調和のある場所とあらわされていました。それが1970年代後半になると「都会」という言葉に変わり、その冷たさも意識されるようになります。この曲は1975年発売のアルバム収録のものなのでその過渡期にあります。この歌詞にはまさにその過渡期の揺らぎがあらわれています。

## 理想と現実のギャップ

私が当日、くろい音楽室ではじめてこの曲を耳にしたときに感じたのは、「都市なのかそうでないのか、都市礼賛なのかそうでないのか、どっちなんだ?」という疑問です。本来流星は田舎でのみ見えるものであって、それが都会において表現されるのは奇妙なことではないでしょうか。このギャップにはじまり、この歌詞には奇妙な点がいくつか存在します。青白いきみの肌、ふるえる君、窓の外・・・これらは都会での語り手の身体的不自由を象徴しています。決して「きみ」や語り手が街中で明るく闊歩することはなく、室内で青白い肌をして震えているのです。それとは対称に、精神的自由もあらわれています。"夢を紡いでる"、"胸の中うとうと"、"ひざまくら"、などこれらのポジティブな表現は全て語り手の頭部においてのみ可能なものです。



## 女性は、やっぱり必要

オイディプス・コンプレックスをご存知ですか?ギリシャ神話から作られた理論ですが、息子はまず母親に恋をし、父親が恋敵となる。そのことで父親を超えようと努力し、立派な男性となる。だが結局父親から母親を奪い取ることはできないので、別の女性を伴侶とし、新しい家族ができる。これのくり返しによって人間は繁栄し続けるものである、という理論です。この語り手は「家(田舎)」を捨て都会に出て来たわけですが、その町を広げるのはきみの「ひるがえるスカート」です。冷たくもきらびやかな都会において、孤独ながら自立を目指すのではなく、やはり、家の中で、女性のひざまくらで、夢を紡ぐのです。そしてまた新たな「家(田舎)」を作り上げることとなります。

## H.G ウェルズって何だ? キャプテンネモは、ディズニーシーの?

くり返しの多い歌詞に突然でてる固有名詞のこの2人。人なのかどうかも怪しいので調べてみました。H.G ウェルズは作家。キャプテンネモはジュール・ヴェルヌ作の文学作品「海底二万里」の登場人物(キャプテンネモがディズニーシーのあるアトラクションに登場すると指摘を受けましたが、それもキャプテンネモです)。

ウェルズとヴェルヌ、なんとこの2人、「現代SFの父」として呼ばれる著名な作家だったのです。ここに宇宙や流星のイメージが挿入されるということです。作詞家のインテリジェンスといたら。そしてその現代SFの特徴として「現実から外挿される世界を描きながらも現実という束縛を離れる」といったものがあげられます。これはまるでこの歌詞の世界観のようです。もっともこの歌詞は、「現実という束縛を離れようとしながらも、現実から外挿される世界から逃れられない」とも解釈できそうですが・・・

## 結論「脱・日本的個人主義はまだ無理かも」

身体的に自由のもてない都会の中で、精神的な自由(きみ)によって「家(田舎的なもの)」を作り上げていく語り手を読みとることができます。「流れ星」「月灯り」などの空での出来事は、本来都会では見えないはずのもの。近代化のすすむ70年代の日本において、脱日本的な個人主義が目指されましたが、当時まだそれはまさに絵空事だったのでしょうか。都市における個人主義の筆頭の中で人との繋がりを求め、また家を作りたがる感情があらわれています。1975年という過渡期だからこそ、この感情と現実の揺らぎがここに落とし込まれたのではないのでしょうか。